

〔資 料〕

## 笹岡家が語る衣文化回顧録

— 笹岡洋一氏・照子氏聞き書き —

安 蔵 裕 子

Memoirs of the Sasaoka Family in Connection with the Culture of Costume

— An Interview with Mr. Yoichi and Mrs. Teruko Sasaoka

Yuko Anzo

今回、風俗史・服飾文化史・人形史の研究者として知られる笹岡洋一先生ご夫妻にお目にかかり、ことに先生が長年愛しみこだわり続けてこられた着物や裂にまつわるお話を伺う機会を得た。本稿は、その対談を服飾文化に関わる聞き書き資料として位置づけ、ここに記して報告するものである。

昭和女子大学光葉博物館においては、笹岡先生のコレクションを展覧する「姿を変えた着物たち」(2009年10月26日～11月21日)が開催される運びとなり、この機会に是非、笹岡先生ご夫妻にインタビューを試みたいと希望して、ご夫妻と長年親交のある神埜正子氏(歴史文化学科非常勤講師)にご協力いただくこととなった。

笹岡洋一先生のことは、服飾分野に携わる者であれば誰もが存じ上げ、学会の研究会などを通して親しくお話を伺う研究者も多い<sup>註1)</sup>。我々もご自宅をお訪ねし、数々の蒐集品の時代的背景や資料的価値などについてご教授いただいている。蒐集された多種多様な裂は、重厚な折本裂帖に収められており、先生はそれをアルバムを開くように一点一点解説してくださる。折本は古裂の史料集であると同時に、装丁の細部にまで美の表現が行き届いた先生自作の工芸作品でもある。例えば公家装束の色目一紫の薄様一で表装するなど、デザインの発想は歴史的な造形表現に基づいている。

「ただ美しいものに憧れた」と先生は素朴に語られるが、美しいものとする評価の源泉が如何なるところにあるのかは計り知れない。伝統の巧みや風俗習慣のお話は淀みなく多方面から展開し、遠く過ぎ去った時代が蘇る如く魅力的である。「古布の文様の醸し出す風趣とか、物言わぬ人形や雛に惹かれるおかしな男の子でした」<sup>註2)</sup>からは幼少の頃から歴史的にも芸術的にも探究心が旺盛であったことが窺える。その「惹かれる」ようになった背景にはおそらく、「浮世絵のように美しかった」というお祖母様の存在が大きく影響していると思われる。そのお祖母様が明治8年頃、婚礼でお召しになった江戸期の打掛は、代々花嫁衣裳として着用された。また旧習の着装形式を示している三枚襲の着物も大切に保管されている。

風俗史・服飾史分野とも関連深い国文学を学びながら、歌舞伎役者の演技や衣裳美に魅了され、凝った衣裳の人形制作も手掛けられたという学生時代からすでに骨董店を巡っておられ、着物や裂の美に対する鑑識眼を培ってこられたと拝察する。その頃から、所有者の手を離れた着物や、一般には「櫛櫛<sup>ぼろ</sup>」と言われる古びた布の中から目に留まった物を蒐集し、染め直して装いとする、屏風に構成し鑑賞する、人形の装束に仕立て用いる、裂帖に収め史料とする、など様々な手法で古布に新たな息吹を与えてこられた。それらは、文献的研究と造形的研究の両面から裏付けられた深い学識と卓越した美意識によって創造されてきたものと言えよう。

教鞭を取られていた頃は、装束書に基づいた時代衣裳の雛形を縫製し、授業の教材とされた。手の込んだ雛形が、今も華やかに箆笥の引き出し一杯に保管されている。近年も依頼された研究会や展覧会のために、雛形や実物大の服飾資料を製作するなどして、教育方法の研究にも力を注がれてきた。

また笹岡家には代々着用された婚礼衣裳や産着が残され、受け継がれた衣生活の実際を知ることができるが、さらに興味深いのは、先生ご自身が家族のために着物を創作してこられたことである。着物の創作は、昭和19年、ご結婚の際の花嫁衣裳に始まる。先生は奥様に数えきれないほどの着物をデザインし、染料などの色材や刷毛類の道具を揃えて、ご自宅で染色したという。お嫁さんやお孫さんのお祝い着も製作されたのである。「結婚の頃は物がなく、子供の成長の頃も贅沢はできず、自分の創意工夫で製作するのが当たり前でありました」と戦中、戦後の社会状況をも回想しながら語られた。奥様は夫が課す縫い物に追われて、針仕事が絶え間なく忙しかったと語っておられる。古い生活様式が大きく転換した昭和20年代後半から30年代、先生デザインの奥様の着物姿は、お子様のPTAでも目を引く存在であったという。今日まで、先生の儉しくも創造性豊かな活動を支えてこられた奥様のお話は、女性の生活という視点からも貴重な記録となる。着物を管理し、生活を切り盛りする女性の生活についても先生は歴史を繙くように話された。着物生活の中でも、進歩的に生き抜いた女性たちのことを熱弁されたのが印象的である。

最後に拝見したのは、「再び楽しんで作り直しています」という学生時代に初めて手掛けられた屏風である。それは、江戸時代の着物から後に打敷へと再生されたという、地が緑色の友禅染で、ポイントに金糸刺繍が施された裂で構成されている。古着屋で先生に見出された江戸の古裂は、屏風に表装されて70年もの歳月を経ているが、金糸刺繍や糸目糊の勢いからは、伝統の手技が息づいていることに気づかされる。「傷んでいる部分をもっと上手に補修したい」と、裂に愛情を注いでこられた先生のお姿を間近に拝見することができたのである。

笹岡洋一（ささおかよういち）

大正10年	1月19日	東京都（市）に生まれる
昭和8年	4月1日	府立高等学校尋常科入学
昭和15年	4月1日	東京帝国大学文学部国文学科入学
昭和17年	9月15日	同校卒業
昭和17年	10月	海外教育協会瑞穂学園教員
昭和19年	2月28日	結婚
昭和20年	7月	京都師範学校助教授
昭和23年	4月1日	東京都立桜町高等学校教諭
昭和56年	3月31日	東京都立赤城台高等学校校長 定年退職

日本風俗史学会会員・日本人形玩具学会会員・服飾美学会会員  
川崎市高津区二子在住

註1) 昭和女子大学近代文化研究所では、2006年及び2007年に所員勉強会の講師として2回に亘りお招きし「銘仙の歴史と展開」(2006年12月20日)、「明治の襲について」(2007年2月7日)のテーマでお話いただいた。

註2) 笹岡洋一氏の蒐集品や屏風、掛け軸、着物、帯、人形などの造形作品を展覧した、たつの市立龍野歴史文化資料館開催「よみがえる裂—もったいない時代の布たち—」展(2008年10月)図録の中で「こぼれざいわい」と題して笹岡氏が回想されている。本稿中の図版3, 5, 8-1, 9-2, 10-2, 12-2, 13-2は本書より転載した。

1. 本聞き取り調査は平成 21（2009）年 8 月 8 日、笹岡洋一氏の自宅にて行った。
2. 語りは、笹岡洋一氏と奥様の笹岡照子氏である。
3. 聞き手は、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科所属の安蔵裕子と同非常勤講師神埜正子である。

\*（ ）は筆者が補った部分である。

\*本稿では、歴史的背景を適切に伝えるため、語られた用語はそのまま記録した。

## 老舗割烹で発見された寛永雛

安蔵：笹岡先生は、新潟県村上の人形様のお祭りにいらした、と神埜先生から伺いました。私は近日、村上へ出張します。卒業生で料亭の女将さんをなさっている方（山貝世津子さん、昭和 45 年食物科卒）にお会いするためです。町の景観を変える、「チーム黒塚プロジェクト」という活動の代表の方で、今年第 2 回ティファニー財団賞（伝統文化振興賞）を受賞したということです。

笹岡氏：村上には静かでない町です。村上では城址まで登りました。昔のものを保存したり、町興しにいろいろ取り組んでいますね。古い様式を残している立派な家がずいぶんありました。酒屋さんもね。安蔵さん、この図録<sup>註3)</sup>で少し勉強していかれた方が良いでしょう。これには春のお雛様の祭り、夏の屏風祭りが載っています。3 月の祭りのときは雛を方々の家で飾ってましてね。

神埜：確か、吉徳の小林さんと林さんが、お人形の新発見があったとか言ってましたよね。それが古い料理屋さんで、とか。もしかしたらそのお料理屋さんではないかしら。安蔵さんが行かれるの…。

笹岡氏：そう料理屋さん、なにげなく電話のそばにあったとかで、ふと見たら古い形のお雛様で、寛永雛の新発見があったって<sup>註4)</sup>。(図録の中から)これですよ。吉徳の方が言っているのはこの寛永雛(図 1) ね。素朴ですけど、金欄でも金地金欄を使っていますから、こういうものを購うことができたのはかなりハイクラスです。男雛が赤ちゃんを抱いているのは元の形ではありませんね。誰かが抱かせたもので、ちょっとしたいたずらのようにも見えます。日本人は優しい気持ちを持つ



図 1 新潟県村上市小町の老舗割烹新多久で発見された寛永雛  
左：男雛，右：女雛（早川書店蔵）

註 3) 『城下町村上 町屋の人形さま・町屋の屏風巡り』村上町屋商人会発行 2003 年。図 1 は本書より転載した。

註 4) 村上から帰り、笹岡氏から吉徳の小林すみ江氏（10 世山田徳兵衛氏ご息女、人形玩具学会副代表、TV「なんでも鑑定団」の人形部門を担当）をご紹介いただき、さっそく伺った話によれば、吉徳の方々は、佐渡への人形調査の帰りにたまたま割烹新多久を訪れたところ、板長の後ろに置かれた雛人形に気が付き、「目が点になるほど驚いた」と、その時の寛永雛との出会いを語ってくださいました。「立ち雛の様式から座った雛のスタイルになった初期のものです」と教えていただいた。

ているんですね。良い人形です。英照皇太后のものであったとされる有職雛を偶然京都の古道具屋で見つけましたが、いいお雛様で、女雛に小さな御所人形を抱っこさせてました。

安蔵: やはり、その料亭ですね。新多久とありますから。確かです。びっくりです。寛永雛の特徴は  
どういうところですか？

笹岡氏: 今では寛永雛と呼ばれて古くて立派なものです。寛永雛という呼び名は、便宜的に名付けた  
だけでね、明治になってからです。江戸時代には次郎左衛門と古今雛だけが固有名でね。寛永雛と  
いわれるのは民間風のもので。「ともづくり」といって冠も顔と一緒に作っています。着物と袴  
という二部形式で貴族の伝統を表していますから貴族的です。けれど小袖形式なんです。

庶民は想像しながら作ったのですね。女雛の方は女官の着る十二単の袴で、真ん中の三角の接ぎ  
は捻襠ねじりまちですよ。これは有職に則っていることになります。享保雛と呼ばれるものになると広袖の装  
束になりますね。

安蔵: これは下を立体的な三角にするために接いでいるのかと思いました。それからこの一番上に着  
ているのは短いので、一見唐衣かと思いましたが、本当に小袖ですね。

笹岡氏: そうです。いつの頃からか、裾が外れて出てしまって、このように浮いていますけれど、も  
とは着物の裾は袴の中に入れてあったわけです。

安蔵: それと男雛の下の左右に出ているものは何を表していますか？

笹岡氏: それは本来は内へ折りたたんで胡座をかいた形を表していたのが、糸がとれて、そのうち元  
の形が分からなくなってこうしたんでしょう。

(雛の様式について、数冊の図録を参照しながら、民間で想像して宮廷風に創られてきた多種の雛の様式を教えてい  
ただいた。宝暦の頃の丸顔で金地金襴の小袖着装の雛は、村上で発見された雛に酷似している。)

笹岡氏: 雛人形は江戸十軒店で、押すな押すなの(賑わいで)庶民が買っていました。それはまた古  
道具屋で商品として流通したのですよ。地方では平気でお祝いの進物としてましてね。昔はリサイ  
クルが当たり前でした。岐阜の養老町の庄屋の記録で、何を貰ったかというリストの、お祝いの欄  
に古雛というのがあるんです。古いお雛さんを商品としていた、ということ。大名が買いに行くよ  
うなところもあれば、一方には古道具屋のお雛様も商品として通用していたということがあります  
から、これも江戸時代の消費世界です。今もリサイクルでね、私は骨董市で買って喜んでいるん  
ですけどね。明治の初年にはね、時の政府が三大節を重んじて、五節句を一時は廃止<sup>註5)</sup>とい  
うことでした。雛の商人は痛手でしたが、明治天皇と昭憲皇太后の人形は許されていたわけです。国家  
意識を教え込むものだったのでしょね。

## 人形制作の道 一六代目菊五郎の「道成寺」との出会い

笹岡氏: 木目込み人形はピンからキリまであって。家内などが作って飾っています。簡単なものあり  
ますね。押し絵も人形も小さい頃から自分でいろいろやってみました。羽子板は大きな板(押絵を  
貼り付ける板)を大工さんに頼んで作りました。人形は帯を結ぶのが面白くてね、着せ替えに帯を  
作りました。帯の結び方は、周りにいる女の子のふくら雀、立て矢の字などを見て真似まして。

---

註5) 五節句廃止令 明治6年

昭和2年に、親善のためにアメリカ各州からお人形が日本中の小学校に届けられたんです。その返礼として吉徳の山田徳兵衛（十世）などが仲立ちで、小学生がわずかなお小遣いを出して、数ではなくて良いものをとって市松人形がアメリカへ送られまして。中心になったのが渋沢栄一。アメリカに行く前に、皆さんへのお披露目が百貨店でありました。険悪な時勢に人形でつなごうとしていたんです。初任給が60円かそこらのときに、一体が200円とかいいます。それは丁寧に作られた着物など着ていました。日本人は鬼畜米英といってアメリカの人形を燃やしたり、竹槍で突いたりして随分失ったんです。でも、そっと隠していた人がいて、日本からアメリカに里帰りしました。今度はアメリカへ送った日本の人形も里帰りしてデパートで展覧会が開かれました。十一世山田徳兵衛が一肌脱いでね、出しっ放しで色がさめてしまった市松人形を着替えさせたり、また作り直すなどしたようです。（人形玩具学会の）是澤博昭さんが良く研究しています。

当時、女の人は人形の服を作るのも教養の一つ、仕事の一つでね、子供や若い娘も着物の作り方を勉強になりました。裁縫は婦女子の嗜みでもありましたね。戦争中まではそうでした。おばあさん、お母さんが人形の着物を縫う、ということですからけれど、子供との生活の一部でした。新しくは「リカちゃん人形」でしょうか。

川島町の遠山記念館には『「いき」の構造』で知られる九鬼周造のご関係の家で所蔵していた人形があります。お嬢さんに生き写しで、生々しく少し気持ち悪いですがけれども古代裂の着物でよい仕立てです。

針一本で生活していた叔母の話ですが、叔母は明治の30年くらいの生まれで、大久保に住まっていた。旦那が結核で早く死んでしまって二人の子供を育てたんです。共立（女子職業学校）へ行っていたその叔母が言っていました。金持ちの奥さんが人形のために一反持ってきて人形に着物を作ってください、と。そして無駄な事をしてよいので、友禅の着物を模様を合わせて縫うように、と言ってきたそうです。当時のお金持ちには人に縫わせるということをした人もいましたね。人形というのは裸で売っていて、（その着物は）各自が工夫して自分たちで縫ったわけですがけれども、頼む人もあったということ。私は昭和8年、希望の中学へ入ったらね、浅草に行っていちばん大きな裸人形を買ってほしい、と言ったんです。1メートル位のですよ。そんな頼みを聞くなんて親は優しかったですね。それが当たり前と思っていたんですから悪い子供だったんですね。

神埜: その人形は？

笹岡氏: 姪にやりました。惜しいことしちゃった。その着物は母親が縫いました。私が呉服屋へ行って、縮緬は高いので富士絹でした。箱は大工さんに作ってもらいました。やはり（私は）奇人変人ですね。

神埜: 人形は、おかっぱで、「いちまん」というのですよね？

笹岡氏: 関西の方面でそう言っていて、それが関東に移った呼び名で、もともとは「いちまつ（市松）」です。小学校の頃に、松屋で、三越や高島屋とは異なって個性ある展覧会をやっていました。「源氏物語」でね、十二単を見て、それが印象に残っていましたね。形も良いものがありましたね。高等学校で16か17歳の頃ね、六代目菊五郎の道成寺を観て、その人形を作りました。1メートル位のもので。道成寺の人形をね。あまりに芝居が素晴らしくて、上手くて、踊りがまた素晴らしく、衣裳がきれいでね。引き抜きとかね、六代目に魅かれ、その着物にあこがれました。学生するとき、1幕見で、菊五郎の道成寺は幾度も観に行きました。期末試験でも往復2時間かけて、1時間鑑賞で。

魅力的でした。若い時だから感激したのかもかもしれませんけれど。

安蔵: 道成寺の人形はどのように？

笹岡氏: 粘土で作りました。おもちゃですよ。はじめから上手にできるわけではないですから。だれからも教えられないんですから。引き抜きの衣裳を何とか作ろうとしてね、一番初めは赤、その次引き抜いて水色、さらに藤色になるんです。それを全部作りたくてね、工夫して作りました。しかし染めはまだ当時はできなくて、ペンテックスという技法が当時あったんです。デコレーションケーキ用のあれと似たコーンというのがあって、絵の具を搾り出して桜の文様をつけました。ああいう手芸の材料は東京でも伊東屋にしか売っていなかったです。子供の頃、そこまで買いに行ったんですね。コーンに絵の具を入れて、先をちょっと切ってひねり出すと、盛り上って刺繍のようになったわけです。葉の部分は裂を貼ってコーンで縁をごまかすとかね。生地はメリンスでした。下の襦袢も創りましたね。

縫い方は（祖母や母などが縫うのを）しょっちゅう見ていたのでわかっていましたね。女中さんにも教えてもらいました。簪から髪まで作りまして、良いものを作ったと、親は素質があると思ったらしいですね。遠くから偉い先生をわざわざ呼んで見せていましたね。どのように伸ばせばよいでしょうか、学者として行くか、世間の様子を聞きたかったのでしょうか。趣味に生きるにはよほど金があって道楽でやるならよいが、生活をしながらこういうものをやるのは大変だ、と言われたと思います。専門にやるにはそれ相当の財産がなければならない、と母親はわかったと思います。（辻村）ジュサブローさんとかホリ・ヒロシさんとか、極めてきた人ですからね。

神埜: 先生のこの作品（図2）は、吉徳の学芸員の林（直輝）さんが、「人間国宝の作品に値する」と言っていました。

笹岡氏: 本格的に習ったのは退職後です。それまでは自分で本も見たりして作りました。

## 古裂を求めて古着屋街巡り

安蔵: 古着を買って蒐集されたり、屏風にする、…といった創作はどのように？

笹岡氏: いちばん初めに作った屏風があります。あとでお見せします。ところがうまく作っていないんです。古いものはうまく作っていないです。求めるものは新橋の露月町でした。そこは昔から古着屋がわりあい集まっていた。神田の岩本町に今もありますが、岩本町には、一時大きな市場がありました。古着の。江戸時代は富沢町でした。盗難事件があると、まず古着屋を調べることになっていて、そのころ非常に役所と密接に連絡がとれていたわけですね。窃盗の犯人は古着屋に売るわけですから、店の帳面が大切でした。江戸博（江戸東京博物館）から出ている本に、書上（『四谷塩町1丁目人別書上』（上・下））という本があります。そこには名主の調べがあって、こういう返事をした、とか書いてあります。いい資料にはね『京都町触集成』（全13巻・別巻2）というのがあります。あれは町方のを集めたもので層の厚いところと薄いところがありますが、染物の名前など調べるのには大変役に立つ本です。その中に、「こういうものが盗難にあったから質屋に来た時は届けるように」とあって、その当時の流行の着物などが見えてきます。



図2 桐塑人形「道成寺道行」  
（平成5年作）

安蔵: 古着はどこでお買い求めになって？

笹岡氏: 日本橋の裏に古着屋の丸八がありました。品のいいのがありました。日本橋の裏には外人相手に、京都の万寿堂、象彦もあって、そういう所に古着屋がありました。結城とか、唐棧とかね。その頃は、やはり高級なものを扱っていました。役者とか芸者などが普通の店では売っていないもの珍しいものを探して買った所です。

それから今の神田岩本町3丁目のあたり、江戸時代から柳原土手通りの古着市場として知られた場所ですが、そこは明治の頃から戦前までは「岩本町古着市場」と呼ばれて古着屋が軒を連ねていたんです。そこで買った着物は「柳原物だ」という言い方をしていました。古着なんだよという意味があったわけです。今の神保町に古本屋が並んでいるように古着屋が沢山集まってまして、戦前の柳原は大衆的でしたね。男の大礼服なども柳原で買っていたようです。巢鴨のとげぬき地蔵の方へは、土曜日か日曜日に出かけました。4の日に縁日ですからちょうどその日ならよかったです。

安蔵: 何軒くらいの店が出てましたか？

笹岡氏: 20軒ほどです。なかなかおもしろかったですね。昭和30年から40年の間ね。そのあとは露店が出てきました。六地蔵の所。近頃はあまりいいものは出ませんね。

今、古着というのは、元の値段の10分の1もしないのですね。1回袖を通したぐらいでも。青空市なんて1000円位でいいのがあります。神埜さん、あなたと高津駅前のリサイクル屋で見ましたね。

神埜: 先生はお目利きなので、めったにないものがパッとわかりやすいです。

照子夫人: 何にするの、どうするの、と言ってもやっぱり買ってきますね。たしかに古着でもきれいですものね。

笹岡氏: この着物は今の辻が花でしょ。シミがあるから安くなるわけで、2000円位？でもきれいですね。裏もととてもよいですね。もったいないね。

神埜: 昔だったらシミ抜きしたでしょう。今の人は年配の工芸の有名作家でも古着の模様のところだけ切り取って使ったりしますから。

笹岡氏: この着物は平安時代の文様ですね。500円位でした。三十六歌仙の和歌の模様がいいからね、もったいなくて。

照子夫人: この総絞りのものは、表も見事ですけど、ちゃんと全部裏打ちしてあるところに驚きますね。絞りはおしりが出るから全部きちんと絹地で裏打ちしてあって。丁寧に糸で止めてあります。私たちにはできませんね。大変なことですね。

笹岡氏: これは羽織だった。今は丈が長くなったでしょ、わりあいとね。我々の時は短かったものです。羽織の長さは本当にしょっちゅう変わって。スカートの丈と同じようにね。関西と関東でも違いました。江戸時代のものは着物と同じ対丈のものもあり女は着ることを禁じられてました。

神埜: 奥様の頃は短くて半反でできたのですね。

安蔵: 屏風を手掛けられたお話にもどっていいですか？

笹岡氏: 露月町で買った古着で屏風を作りました。露月町には学生の頃よく行って、恐る恐る入って行って。

神埜: もっと前からでは？

笹岡氏: そう、大学に入る前からでした。(笑)押し絵を作ったり、人形も作ったりしてましたね。

本なんてないですから、自分で工夫していろんなものを作りましたよ。今から考えると親も親です

ね、なぜ辞めさせなかったのか。子供をととても大事に思ったのでしょうかね。

その頃、親類のおばさんに針一本で生活している人がいました。子供を育てながら人の着物の仕立てで生活して。そこによい家の奥さんの着物の端裂が1センチくらいの幅の幅があって、そういう美しい裂を見ていると「叩はたきにしないで」と、言ってましたね。普通は端裂は着物の持ち主に返さなければならぬものですが、返さないでもよいくらいの長さのもの、それを「君知らず」というのだと直線裁ちのことを研究している森南海子さんが著書に書いていますね。仕立物からちょっととっておいて小さい裂は返さないで接ぎ合わせて自分の襷のひもを作ったりね。依頼主の本人は知らないから君知らず。東京国立博物館の資料に、唐棧の洗い張り屋さんが見本として収めたものがあるでしょ。いちいちこの唐棧は、らんだて、ごまがら、…と名前が付いています。明治の初めの洗い張りやの木綿の貴重なサンプルです。

安蔵: 唐棧専門の洗い張り屋があった、ということですね。

笹岡氏: そう、明治にあって、戦中の頃まではあったんじゃないでしょうか。私の唐棧の裂を接いだ作品は、民芸館のこれを真似て作ったんです。この企画は福島県立美術館であった『ハギレの日本文化誌一時空をつなぐ布の力一』(2006年9月)といいまして、展示品は学芸員の方が10年もかけて、よく集めたと思います。立派な接いだ着物が展示されましたね。文化女子大の更紗の下着は三井家のですね。

安蔵: 上杉神社所蔵のこれは上杉家伝来の胴服で、157枚も接いだものでそうで。

### 嫁入りの「迎小袖」「待小袖」

笹岡氏: 私は変人奇人でね。呉服屋でもないのにね。

私は子供のころ年寄りと一緒に住んでいましてね。祖母がわりときれいな人で、親がよい生活をさせていまして、そのばあさんの膝枕で昔の話を聞いていました。その中に昔の思い出話で、着物の話をしてね、お祭りの時にこんな着物を着て、初めて人力車に乗せてもらった、など聞いていますとね、中でも打掛の話を聞くと、どこにあるのか、欲しいなと思いました。

私は体がちょっと弱かったから、みんなと一緒に軍隊ごっこや兵隊ごっこはしませんでしたからね。年寄りの話を聞いて、美しいものにあこがれたことは事実ですね。

神埜: 打掛をかぶって遊んでいたそうで。

笹岡氏: その打掛、年寄り(祖母)の打掛(図3)は、家内も着たし、嫁にも着せました。今度、昭和女子大で展示されます。白い綸子のね。それは、叔母のところから譲ってもらったものです。おばあさんが明治8年頃に結婚したのですが、その頃、その父親が、古着を東京から求めて、娘の祝着としたのです。曾祖父は横浜の生糸の商いをしていました。祖母はなかなか頭の良い人で昔の話をよく覚えていて、祖母のおじいさんが、お前は嫁に行ったら亭主のちょ



図3 白綸子乱菊亀甲文様総繻打掛 江戸後期

ん髷を結わなければならないのでおれの頭を貸してやるから練習しろ、なんて言われた、とかそんな昔の話も聞きました。

明治8年頃の結婚式は、新郎側は麻袴で結婚式を挙げたのです。いまでも京都の祇園祭では麻の袴を新しく作って皆さんお召しになります。城下町にも古い伝統が残っています。

神堊: 奥様は何年生まれですか？

照子夫人: 大正10年生まれですから主人と同年です。

神堊: ご結婚はいつですか？ 着物を作られていた頃の事をお聞かせください。

笹岡氏: 結婚は19年です。その時家内は、ちっともよくない友禅の着物を持ってきてましてね。

神堊: 婚礼のために準備されていた振袖でしょう？

笹岡氏: 切れ端がありますよ。いつか三味線の袋(図4)になっています。

照子夫人: そんなものがあつたかしら。あらこれでしたっけ。

安蔵: きれいですね。この三味線の袋になったのは袂のところですか？

笹岡氏: いや、普通の着物は三丈ですけど、振袖用は四丈ものですから普通の着物よりたくさん端切れが残ったんでしょう。着物は欲しいという人に売ってしまいました。

神堊: 素敵ですのに。先生の趣味に合わなかったんですか？

笹岡氏: だめですよ。私が婚礼の時に作ったのはこれ(図5)です。帯はね、友達の店に400円で一つしかなかったのを買いまして。その昭和19年頃はね、みなモンペでね、呉服物は一切作ってはいけけない、贅沢は敵だ、という時代でしたから、白生地を買うのは大変だったんです。叔母の知り合いで渋谷の染物屋さんで二反だけ残っているというのでそれを買って作りました。あるだけよかったです。振袖にするには一反では足りないのです。薄いピンクに染めて(もらった)。それから私が金銀の箔と泥で描きました。

神堊: 文様のモチーフとか、デザインの源はどこからですか？

笹岡氏: 宗達ですね。宗達の絵巻を真似たわけです。全く非国民でね。

安蔵: 打掛ではないですね？

笹岡氏: このピンクの金銀箔泥のは振袖ですからお色直しです。打掛は、さっきの話の私のおばあさんが着たもので、白紬子のです。私は叔母からもらってましたから。昔はお色直しで着替えました。ですから、婚礼では清浄潔白の白の打掛で、(作った方の)ピンクで色直しに。嫁を迎えるので「迎小袖」「待小袖」といって、他にも着物を男の方で用意しました。この言葉は江戸時代からでしょうね。富山などではずっと言ってます。江戸時代からで、小袖形式が発達してからでしょうね。



図4 三味線の袋になった照子夫人の振袖端切れ

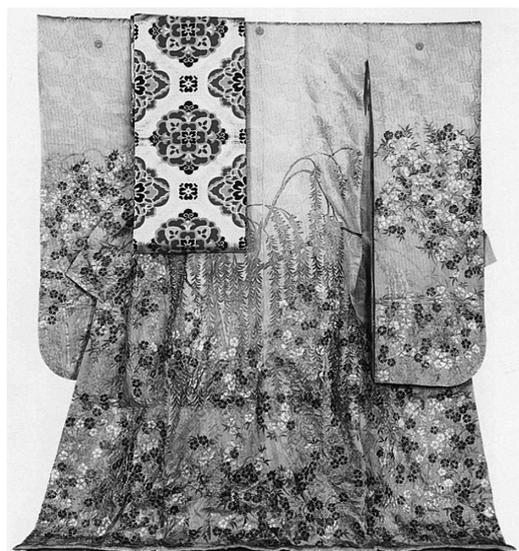


図5 淡紅色紬子地柳桜文様描絵振袖と丸帯  
昭和19年

今の婚礼はレンタルが多いようですし、形式的になりましたね。

我々の婚礼の頃は物が無い時代でしたから下に着た白い着物などは、婚礼の後に染め替えて喪服にしたりしてました。日本人がどうして白を、お産の時も、なぜ白を使ったのでしょうかね。紫式部がお産のときの様子を墨絵のような美しさだったと書いてますね。白の着物に銀の刺繍、そしておすべらかしの黒い髪で。昔は織物を白くするのは難しく贅沢だったようです。

笹岡氏: 今回の昭和女子大の展示では、婚礼の時の着物と帯とが共に出ます。

安蔵: 「よみがえる裂」の展覧会図録に「私の婚礼の折に調製した衣裳です。」とありましたがとても思い出があることですね。染めのお仕事はいつしていらしたのですか？

笹岡氏: 昼間は勤めがありますので（作業が）できないので、夜になって作っていたんですね。

神堃: 創作意欲がおありだったんですね。縫ったのは奥様ですか？

照子夫人: 婚礼のは違います。嫁いでからは大体は縫いました。家でいつも縫ってまして家のものだけで精いっぱいでした。

神堃: 特別な礼装でないものでどのくらいの時間がかかったのでしょうか？

照子夫人: 少しずつ作っていたからわからないです。学校では運針のスピードを競うことがあって、時間を計ってやりました。一通りのものは一応何でも習いました。結婚後はうるさい人に「こうしろ、ああしろ」と言われて、泣かされましたね。

笹岡氏: 戦中は呉服屋は宛い扶持です。留袖もその呉服屋に一つしか残っていない。当然、模様の吟味などはできません。高等学校の友達の親が呉服屋で、神田で、留袖が1点だけでした。200円位だったと思います。帯も400円位したかな。訪問着もやはり200円。物価統制令があったからそうだと思いますね。だいたい40～50円でいろいろ買えたから、そんなものでしょう。待小袖は伊勢丹でたった1枚しか残ってなかった。昭和19年です。訪問着、それが1点しなくて、それを買って紋を入れて作ってもらいました。でもね伊勢丹だからわりあいきれいなのでしたよ。

照子夫人: 教科書ではないですけど、学校の本が一つ残っていました。17年、18年の冊子です。

神堃: 軍需品作業など書いてあります。その頃の軍需品を作っているところや裁縫しているところの写真がありますね。

## 繕い、接いで拵えた時代 一掛襟、鉤衿、洗い張り

笹岡氏: 夏物の座布団はしまったかい？ 嫁さんにはね、お盆には着物1枚くらいは作ってやる、というのでね、小千谷縮、小千谷縹を買いました。しばらく着ていましたが、いつかこの座布団になって使っています。これは19年に日本橋の三越で手に入れましたね。普通は二丈八尺くらいのものが二丈五尺くらいで、反物の長さが足りなくて工夫して縫いました。短い反物しか織れなかった、許されなかった時代です。まず袖は長く出来ず一尺一寸、それからかきおくり註6)、三つ襟、といって襟の幅は狭くして掛襟のところは3つ接ぐんです。店員が教えてくれました。袖は一尺にしなさい、とか襟は三つ襟にしなさい、てね。昔の人は工夫してそれくらいのことは考えましたけれど。昭和15年7月7日に七七禁令という贅沢品の禁止が出て、大東亜戦争が始まったんです。

普通は、棒衿ですけど、その鉤衿というのは、このように、…ね。（先生が図を描いてくださった）

---

註6) 鉤（鉤）衿: 用尺の足りない場合、反物で袖・身頃を取った残余の布の幅を半裁し、その一つを襟とするが、残りを衿先を斜めに裁ち合わせにする裁ち方。

模様を表に出すためには下前の接ぎの縫目が見えます。

安蔵: 縫い目のある衿を下前にするのですね？

笹岡氏: その通り。それから掛襟についても普通は中まで全部とおっているわけですが、短い反物だと掛襟も短くなります。

神埜: 今、そういうのは古着屋に結構あります。見かけます。

笹岡氏: 掛襟を付け始めたのは元禄時代で、西鶴の頃からです。「当世の風俗見良げになりぬ」とあります。ここだけとりかえればよい、とう知恵です。現在の着物の袖口は裏の方だけ別の裂が付いてますね。これも西鶴の文によると袖覆輪そでふくりんというものが出来て、即ち袖口の裏の部分に別の裂を付けて補強に役立てたとあります。

掛襟というものはもとは労働着に付けるものでしたが、江戸時代の末には儀礼的なものにも付けられたことがあったんですよ。流行りを真似るといふことから必要のないものにまで付けることもあったわけで。

神埜: 確かに付いているのも見かけますね。

笹岡氏: 掛襟の長さで反物の長さが分かるわけです。農民のものは自分のうちで織っていたからできるだけ短く、本来必要な長さが足りない物もあるんです。昔は裾を引きずったものでしたから、贅沢な人は長く、鯨尺で着丈四尺が普通でしたが、引きずる時には、祖母などはみっともないからと言って四尺四寸と長くしていましたね。わりあいと安物の反物は短くて、良いものは長い端切れが出ます。今でも呉服屋さんで長い反物は端切れが二尺くらい出ます。そういうところは昔も今も同じですね。

樋口一葉の日記の中に、着物をいっぱい3つも4つも幾つもの裂を接ぎ合わせて作ったことが書いてあります。お尻(のところが)が擦りきれてくると、同じ着物のどこかを切っていいところをお尻の部分に当てて繕ったんですね。それで羽織を着ていないと接ぎ目が見えてとても恥ずかしい、ということ。羽織を着ていけば見えない。それから、妹と一緒に内職したことを書いています。樋口一葉は吉原の近くで子供相手の店をやりながら生活していて、よく図書館へ行って勉強できましたね、どうやって時間を作ったのでしょうか。夜の縫いものも大変でしたでしょうし。樋口一葉は妹と一晩で他の人の着物を仕立てなければならなかった、それが当時の女の人の内職で、当時の女性のことが細かく日記に記されているわけですね。それを憐れんで中島歌子が着物を下さったと、あります。若い時にあれだけのことを筆ですらすらと書いたのですから、よっぽどの天才ですね。

神埜: 古着を作り直すとか接いで繕う、といっても今の人(現代人)にはもう、よほど注釈をしなければならぬのではないですか。

笹岡氏: 太平洋戦争の頃は、お金というより品物が優先した時代でした。(国民)徴用令の時代でした。軍事景気でずいぶん儲けた人もいますけれど。花森安治の言葉といわれる「欲しがりません勝つまでは」の時代で、「あなたの袖は切りなさい」といわれたものです。(袂を切った布で)兵隊さん何人分の布団ができます、とか言ってね。技術保存で、一部の織物、染め物は国家で保護されましたけれど。

子供が20年に生まれたときも産着を買いましたが、やっと店に2枚きり残っていないのを買いましたね。

それから普段着は解いて洗い張りをして着物に縫い直しました。どこの家でも嫁入りに張り板と

いう板を持参したものです。

## 夫の創造世界 一支える妻の針仕事

神埜: 先生がこれまでにお創りになった着物のことを伺いたいです。奥様とのお写真はございませんでしょうか？

笹岡氏: 結婚式の写真がなくて…それだけがどうしてもないね。どこへいっちゃったのかね。

安蔵: 光葉博物館でお着物が展示されると思いますが、実際に着装されているところを是非拝見したいです。

神埜: そして奥様のこともご紹介させていただいたら、作品の価値もなお一層意味を増すのではないかと思います。奥様は裁縫はどこで学ばれたのですか。

照子夫人: 体が弱くて近くの裁縫の学校へ行きました。大森の城南女学校です。小学校卒業後13歳で入って、和裁はいろいろ習いましたね。あとは結婚してから泣きながら、怒られ怒られ縫っていました。

笹岡氏: 女学校ではね、昔は裁縫の授業で、雛形を作ったり、箱迫や、男の袴も縫わせられて。古い袴を解いてそれを洗い張りしたのを持って行って作り直して勉強したようですよ。昔の女の人は必ず旦那、家族の着物を縫ってまして、自分の着物を縫うより家族のものを作ってましたからね。自分のものを縫うときはお里に行き行って縫ったものです。それが一般的な風習でした。和紙の研究者で京都大学の寿岳文章の奥さんのことを、そのお嬢さんが回想で述べています。お母さんが語っていた、と。夫人はご主人と一緒に研究する人でした。でも5月から6月は全部着物の洗い張りをしなければならなくて、5、6月を阿呆月あほうつきと言われたとか。着物を解くなんて辛気な面倒な仕事でしょ、1時間では解けませんよ。その時間に学者だったら何ページも本が読めるのにね。そんなこと（不平、不満）を外に出すようでは奥さんの価値はないわけですね。古い家ではそんなことがまかり通った時代でした。

安蔵: 時代としてはいつ頃までのことでしょうか？

笹岡氏: 戦中くらいまででしょうね。戦後は女性が強くなってきて、靴下がそれまでの絹からナイロンになって、ナイロンと女性は…、（強くなった）といえますね。

幸田文さんは、洗い張りは辛い労働、と言ってます。けれども、洗い張りの最後に裏地の赤い紅絹もの色で指先がほんのり赤く染まったのを楽しんだ、と女心を述べています。後添いの母親は全然張物はしなかったそうです。前の奥さんは旦那のお古だけを着ていたようで、縫い直しては着たようです。それが決して卑しくなく、汚く見えることもなくて、かえって儉しい美しさがあった、と露伴が述べてますね。私の母親も自分の着物なんかほとんど買っていませんでしたね。寝すごすことなく、大事に私を育ててくれましたね。戦前は洗濯屋の自転車が玄関前に止まっているのを恥ずかしいこと、としていたんです。それは、『おばあさんの知恵袋』（桑井いね著 文化出版局 1976）という本にあります。

戦後の10年くらいはまだ日本風な装いが一般的で、だからPTAではみなさん黒い絵羽織を着て、それがPTAのお祝いの折のコスチュームになっていましたね。無地の着物の上に羽織です。洋装をちゃんと着られる人は非常に贅沢な人以外はなかった、という印象ですね。

神埜: 奥様の和装は話題になったのではないですか？

(羽織、コートなど見せていただいて)

照子夫人: 皆自分で縫ったんです。数え切れないくらい。教員の家庭ですから、地味な着物が多かったです。羽織はしょっちゅう着てました。これなんかよく着ましたね。こちらのは華やかですからお芝居に行くときなどに着ました。

笹岡氏: やはり貧しいですから、そして作るのが好きでね。世の中の人には、奥さんを愛しているから作るのだろう、と聞かれますが、違います。趣味で作っていたのです。

安蔵: 着物は、着る人の着装を想像して創るものですよ。

神堊: 着物を創りたいから美しい奥様を選ばれたのでしょうか？

笹岡氏: いつも今度はこのようなものを創ってみよう、なんて考えますからね。私が出張の間は、「これだけ縫っとけ」なんて宿題を出してましたから、夫がいなくても遊べなかったでしょう。

照子夫人: さあ、どうでしょう。今みたいに遊ぶことなどない時代で、外に出ることもなかったですから。もう結婚してからはお裁縫ばかりしてました。縫わせようと思って裁縫の学校を出た人を選んだんでしょう。

神堊: 奥様の功績が大きいですね。きれいなものを縫うのは楽しみでしたでしょう？

照子夫人: 苦しみでしたよ。

## 古裂に息吹を与える手法 一染め、表具の習得

安蔵: お着物の染色について伺いたいです。

笹岡氏: 染料は、昔は、浅草の今もある藍熊染料へ行きました。植物染料もあって。下町は職人の街でね、御徒町から職人の道具を売っている店があります。かんな、釘、…。人形の着物もまず浅草橋の近くで、木目込み人形の裂も売っている所がたくさんございましてね。そして家内の着物には美しいものを創りたくて。婦人雑誌に当時は日本全国、みやぶ染の広告がよく出ていました。

神堊: 婦人雑誌とその付録がバイブルみたいなものでしたか？

笹岡氏: 当時の婦人雑誌はなかなか立派なものでしたね。付録がたくさん付いていました。裁縫のこともね、載ってまして。「婦人倶楽部」、「主婦之友」などは競争しながら出して、あれが農村の婦人などにも子供の洋服のことなどにつけても活用されて、非常に影響力があったのではないのでしょうか。文化勲章的な価値がありますね。商業雑誌ではありましたが。「婦女界」というのもありました。でもやっぱり講談社や主婦の友社が力を入れていました。

神堊: 付録が良かったんですよね。今はなかなか残っていないですけど、デパートの古本市に時々出ています。

照子夫人: 付録を見て使っていましたね。

神堊: みやぶ染の本はまだお持ちですか？

笹岡氏: どこかにあると思うよ。桐山染料の方が古いです。みやぶ染はこれにあります。『家庭染色手芸法』(東京手芸染色協会 昭和12年)(図6)ですね。少し学問的なのはこの本です。『京染めの秘訣』<sup>註7)</sup>。これは染めを初めた頃から活用していて今でも時々見ます。何版も出ていますね。

安蔵: みやぶ染にはチャンチンも扱ってたんですね。

---

註7) 高橋新六著 神陵閣書房 初版大正14年10月。笹岡氏所蔵本は昭和4年2月刊。

笹岡氏: 藍染めは、紺屋の他に、青屋とかいった職業があって鎌倉時代から明治までつづいて差別意識が強かったですね。何故、技術的な特別な人を差別してきたのでしょうか。他にもあります。奈良の大仏を作るときは位を与えても、終われば追放、庭師も昔は河原者というから変ですね。

みやぶ染の項には、半襟の染め、古いセルの利用法とか、廃物利用のことも書いてありました。

この本は昭和12年、私が中学2年か3年の頃ですね。ここへ頼むとね、みやぶ式型紙といって型紙まで売っていました。それを取ってありましてね、この間のふるさと館の展示<sup>註8)</sup>に出しました。

神埜: 型紙は通信販売ということですね。

笹岡氏: たしか、みやぶ染というのは小船町の桂屋商店の商品でした。

神埜: 上手下手は別にして、これによって作っている人がずいぶんいたのですね。

笹岡氏: 昔の草木染が手に負えなくなって、これで世の中の人には助かった。そういえば農村で田んぼの中に、どこ行ってもみやぶ染の看板がありましたよ。

安蔵: 最近、ネットで知りましたが、ホーローの看板が好まれています。みやぶ染のもコレクターがいるようで。染め粉の瓶を集めている人もいます。レトロですね。

笹岡氏: 桐山染料の方が古くて、母などはそれを使っていました。だれも教えてくれる人はいませんでしたから、藍熊染料店で、シリアスというドイツの染料を求めていました。他のは使っていませんね。結構色がよいのが出ます。ほとんどシリアスで、それから顔料をずいぶん使いましたね。

神埜: シリアスはどこが良かったのですか？

笹岡氏: シリアスは木綿でも絹でも使えてね。丈夫だと思います。美しい鮮やかな色には縁がないですし、古びた色にもみやぶ染は使えました。初め、十二単を染めるのにみやぶ染を使って便利だと思いました。

神埜: 表装のほうはいつから勉強されましたか？

笹岡氏: 博物館に行くと素晴らしい表装があります。骨董屋でも高く買えないですから、自分でやってみようと思ってね。本格的には定年後です。『袷具のしをり』(山本元著・宇佐美直八監 芸艸堂、1937年)、これはいい本です。大正時代からの本で立派ですね。参考にしてください。

安蔵: 今でも改訂増補版を博物館実習の参考資料に使っています。

笹岡氏: 退職の折、組合から3万円か5万円の餞別をもらったとき、全部表具の材料を買いました。昭和56年頃、その時に刷毛が1万円位しましたから結構高かったですね。お給料やお小遣いはほとんど使って…。働きがなくてね。

神埜: 時間的にはどうされましたか？

安蔵: 染色の道具や方法は？ 刷毛の仕事は庭で？ 張り手を使ってなされたのですか？



図6 家庭染色手藝法

(株式会社桂屋商店  
販売品目一覧 染料  
及薬品の部に家庭染  
料 みやぶ染の記載  
あり)

註8) 川崎市大山街道ふるさと館 企画展 「昔の袋もの—生活の工夫そして美の創造—」(平成20年2月)、「袱紗と風呂敷—礼儀と実用の中に見る美意識」(平成21年7月) 他

神埜: 水元は多摩川ですか？

笹岡氏: 子供（孫）の着物は、製作に 120 時間かかったことは覚えています。定年退職後は 1 日 4～5 時間はできましたが、勤めている間は土曜と日曜くらいを使って、ラジオを聞いて、音楽を聴きながら、日向の縁側でね。染めものの仕事をしているのがストレスの解消になりましたよ。やはり夜遅くまで時間がかかりました。反物は裁ってから部分部分で染めると色が均一にならないですから、庭で一反のまま張り手で張って染め、蒸したり洗ったり。多摩川で糊を落としました。

### 装い美の行方 一男の着物、女の着物

安蔵: 昭和時代の風俗習慣の変化について、気がつかれるところをお聞かせください。

笹岡氏: 男は服装なんてもう百年前と変わらないですね。「なんでも鑑定団」の中島誠之介さんや落語家の方は美しい色の着物をお召しですね。洋服の色の美しさを取り入れてね。呉服屋でも洋服の美しさを和服に取り入れていて派手な色遣いですね。私は、昔の人の服をそのまま、上布とか結城の古着を買ってきて。帯でも何でも明治の頃とちっとも変化しない。それから今の人には下着の襦袢と上の着物と 2 枚しか着ませんね。昔は襲というものがあって、4 枚くらい着てました。胴着とか下着とか重ねて、襲の美しさがあって、そういう美しさを着ました。しかし着物の手入れや始末がいろいろ大変ですから嫌われてきたのだらうと思います。私は反動的に逆らって生きているようなものです。そして貧しいから自分の家で作らなければならない時代でしたから、古いものを買ってきては自分で染めたりしてね。

私が作った家内の着物のことを、子供の学校の友達が来ていつも変わったよい着物を着てたと言っていました。呉服屋では売られていない変なものですから。

安蔵: 奥様はいつまでお召しになっていました？

笹岡氏: 私の定年のときまでは外へは着物を着ていました。その後は洋服の方が楽で。

照子夫人: (息子の友人が遊びに来ていた) 当時、田園調布の学校では、着物といえば私、洋服といえば他の方で、二人が話題になっていたことを、この本（「よみがえる裂」展の図録）をご覧になって話が出ました。主人の着物のおかげでね。

笹岡氏: 家内はパーマネントが流行ってきた頃でも髪は束ねて結ってましたから。珍しかったですよ。

私の着物は遠目には目を引いたことでしょう。手作りはね、商品とは違ってね。でも家内は、明るい陽のもとではムラが見えていやだった、と申します。家内がそんな束縛から離れたのは私の定年退職からです。それからは伸び伸びと洋服になってね。私は洋服には関心がないです。わからないんです。

安蔵: 先生をなさっていたころは背広？

笹岡氏: そうですよ。せめて、とネクタイは古い裂でたくさん染めて作りました。生徒がそのネクタイを見て、今日はどうだとか言っていました。背広は贅沢なものではなく普通のを着ておりましたけれどね。今だって青空骨董市だって裂の好きな人、分かる人は少ないですよ。龍村の古い裂の写しに気が付く人もたまにいますけど。私は仲間のネクタイを見て、いいか悪いかは少しわかります。銀座のどこの、ネクタイくらいは。

照子夫人: 着物は寸法だけでなくその人の体に合わなければ、合うように縫わなければいけません。大事なことだと思います。それは洋服と同じだと思います。

笹岡氏: また体のほうを合わせて着ている人の苦労も大切ですね。合わせる苦労もある。裁縫の本当の上手な人はね、茶飲み話しながら見ていて寸法も取らないでぴったり合った着物を作ったものです。この人にはこのくらいの襟肩明に、とね。骨董市にゆくとね、私は写真撮らせてくれなどと言われます。もう、めずらしい人間になったのですね。

安蔵: お仕事は背広で、帰宅されると着物、ということですね。

笹岡氏: 昔の人は皆そうでした。そう、映画で表現していましたね。主人公の男が顔を洗う場面です。洗面所などなくて、縁側に流してみたいのが出てね、顔を洗っているんですが、妹が後ろで袖を持っていてね。ついこの間のことのようにです。戦後の昭和30年頃まではそんな風景もありました。いろんな分野でその頃までが古い生活でした。葬式もみな黒くなったのも30年頃です。繊維製品が出回って、誰でも合うような洋服が出てきてね。昔はお通夜と葬式では違えていましたね。お通夜は真黒の着物ではなく、鼠色の紋付で、染め抜きでは仰々しいから縫い紋にする、といったフォーマルではなく整えたもので、で、翌日は黒にする。やはり襲でした。白を重ねてね。

婚礼衣裳は白の襲が比翼でありますけど、昔は三枚襲でね、黒、中は赤、下は白、と江戸時代からの伝統で大正時代から変化してきました。重ねると太っていやだ、という思想の影響は洋服の影響で、大正時代の終わり頃からでした。ちゃんとした礼法の本では三枚襲と書いてありますが、今の比翼仕立ての縫製になった理由にもスタイルが関係したわけですね。

安蔵: 女性の洋装姿が盛んに出てきた頃の変化はどうでしたか？

笹岡氏: 同僚の女の先生が洋服を着ていて、着物を着るのは贅沢だと。働くためには動きやすさの機能を重んじる、貧しいから洋服で着物が贅沢、となってきていましたね。着物は手入れが大変ですから。終戦後は着物を着るといのは贅沢な人になった、ということ。働く女性が増えて家庭生活も悠長に縫ったりしてはられない時代。そして、あだ花のように咲いたのは銘仙でしたね。

というのは昭和35年頃まではね、銘仙は伊勢崎、桐生、足利、秩父で盛んに生産されてましてね、その頃は銘仙の着物ですぐれたデザインがありました。家庭婦人には洋服は、慣れないコーディネート工の工夫も必要でしたし難しかったです。親戚の者が、私の生活を知って、PTAにはせめて銘仙くらいは着なきゃね、と言っていました。家では、廃物利用の着物を作りましてね。私の小学校の友達に来て、当時の父兄会の時のことを覚えていて、家内が変わった着物を着ていたことを覚えていて話していました。

子供は越境入学で、田園調布の学校でした。銘仙は、田園調布あたりの奥さんは外出には着てなかったでしょう。その頃の模様は、実に近代的、現代的で、商人は一生懸命でした。でも普段着です。絵羽ではないですから。それからよい着物の質感がないです。過去は女中さんの着物であった時代も。しかしだんだん中流意識が高まって、電気冷蔵庫や洗濯機など買う時代になると、今までは考えられないような斬新な、モダンな、または古典的なものも作られて流行りました。企業は一生懸命でしたから。明治のはじめ、銘仙とは縞などの地味なものでしたけれども、大正時代から変わったデザインが出て、ポスターでモデルには水谷八重子とか使っていました。大正ロマンでね。

戦後23年、24年頃から良くなってきましたが、やはり普段のきもものでした。幸田文さんは問題にしていなかったね。少し格が上がるようなウールが盛んになってきましたが、銘仙は人絹や木綿を使ったものもあって、ときに質が弱い場合もありました。弱くて着物通にはばかにされたものですが、人々の中流意識が高まって、平均すると、国民一人、一年に一反という統計もあったよう

です。織屋は関東中心でした。

安蔵: 銘仙も見えなくなり、着物がよそ行きで、普段着に洋服が着られるようになったのがその頃、昭和 30 数年以降からでしょうか。和装の他に洋装の仕立物をする方も増えてきました。

笹岡氏: 昔は、着物の縫い方や管理にはこだわりがありました。表縮緬裏羽二重は縫いにくいとか、やかましく言う人がいて。木綿の着物でも生地を傷めないように絹糸で縫ってください、とか。場合によっては傷めることがあるから、そういう家ではね、一シーズンで普段着を全部洗って自分の家で洗い張りをするようでした。仕立物いたします、という看板がありました。どこの家でも、縫う人に審美眼があったわけです。子供の着物にしても、毎年の成長に合わせて肩上げも腰上げの位置も変えるわけで、子供を見て、その位置が良いとか悪いとか、話題にしました。今は浴衣でも左前にして着ている人がいる世の中です。

安蔵: つい最近のことですが、電車の中で、隣に座った女性が浴衣の上等なものをとてもきれいに着つけていましたが、左前でした。声をかけても着替えるわけにもいきませんし、カップルでしたから不快になると思ひまして、声はかけませんでした。

照子夫人: 着せた時に間違えたのでしょうか。逆に着せることが結構あります。主人は見て、「あ、反対だ!」と叫んだことがありますのよ。着せてあげられないとそう言えないですね。結構着付けの人でも間違えることがあるようです。これから何年か先にはこれでいいのよ、どっちでもいいの。なんてね。(笑)

笹岡氏: 逆の打ち合わせは死人の着方、というのを知らなければ何でもない。死人も洋服の時代ですから。風習は変わって行きます。

安蔵: お勤めのころ、女の先生は、着物でしたか?

笹岡氏: 昭和 25 年頃、奥さんと講師の人は、帯しめて袴でなかったです。学校へ行くのは袴かと思っていました。帯のまま教えていました。案外ね。

神堃: 奥様の学校の先生は皆和装でしたか?

照子夫人: 袴でした。でも作法の先生は帯を締めていました。英語の先生が洋服で、あこがれでした。大体は袴でした。生徒はセーラー服で大きなリボンでした。

笹岡氏: しかしその頃の日本女子大は着物でした。山形の民俗の研究家の徳永幾久さんの話によれば、寮生のリーダーをお主婦さまと呼んでいたようです。みな着物で銘仙以上のものだったとか。お茶の水女子大あたりでは大学の先生たちが、着物は不経済、不活動で、洋服と比べて費用はこれだけ違います、と散々進歩的な教育をして。小山直子さんは前にお茶大の制服のことを発表していました。でもね、進歩的な女性でもずっと着物を着ていた人はいますよ。私の存じあげている方では羽仁もと子さん、白洲正子さん、近藤富枝さん、鶴見和子さん、澤地久枝さん、…あれだけ進歩的な方々ですけれど、和服をお召しになっていたのは、日本の着物の美しさを理解していらしたからではないかと思ひますね。

洋服を着ている方より美しいと思ひましたね。しかし、それだけ管理する人がいないとあれだけの服装はできませんよね。本当におしゃれでないね。私は洋服を着ている方より好きでした。しかし、汚く着崩して垢づいたりするのは本当に汚い。だからきちんと着るといふのは大変でした。今の洋服のほうが風俗がよくなったと言った方が良いのではないのでしょうかね。

神堃: それは皮肉で仰っているのですね。

笹岡氏: まあね……。

照子夫人: 半襟はよく取り替えましたよ。女学生は半襟を毎日替えたんです。着物の掛襟は汚れたら、襟を付けるとき上手に裏返しにして、山が出ないように工夫しました。自分でやったことのある人でないとわからないですね。基本は1センチは入れて、という風に教えられましたが、主人と結婚して上手に取り替えることを考えるようになったんです。

笹岡氏: 古着を扱っていると、その着物を着たり繕ったりした人たちがいかに効率的に使っていたか、解いてみたりすると、その知恵を知ります。解くことをしたことのない人にはわからないですね。博物館の方など、そういうご苦労をなさっていないとね。一方芸術的な美しさがわからないのも困ります。一律にはいかないですね。

安蔵: 本学は以前、学生や先生が袴の時代に、随分身だしなみに注意を払ったことが伝えられています。創立者人見圓吉先生の奥様が身だしなみにはうるさく、袴の姿が素晴らしかったそうです。襦袢の襟、足袋が真白であること、袴の襷が折り目正しいこと、と。とくに寮生活の思い出としてこの人見緑先生の袴姿とその身だしなみの話題が書かれています。

笹岡氏: 襷の折り目は皆寝押ししてね。場合によっては畳の目とかが付くこともね。今の家ではできないかもしれませんね。

神堃: かつては制服のプリーツスカートも毎日寝押ししていました。

笹岡氏: 今のものは永久加工、パーマネント加工ですか、いい世の中になりましたね。ほんとに以前は女性たちには時間が余計に必要で、洗う、替える、でね。半襟を洗うのも大変ですね。森鷗外が女性の襟の汚れているのを観察していますね。それでお嬢さんの性格がわかるわけです。坪内逍遙が一番細かいですね。

神堃: 非常に詳しい。継方がどうかとか、などとあります。

笹岡氏: 江戸の読本には非常に細かい観察があります。挿絵の書き方まで細かい。『当世書生気質』もね。夏目漱石も森鷗外もそれぞれの観察から、衣裳に対してそれだけの関心があるようですね。文芸作家は着物に凝りますね。今の作家でも文筆家というのは割合と家で着物を着ているようですね。そう、あの三島由紀夫はバーのマダムに聞いたそうです。どういう着物にどういう帯をしたらよいかと。それで小説を読む人が、三島はなんていい好みだと感心したそうですね。

男の人は顔を洗うにしても、後ろから袖を持ってもらって。うちへ帰ってくれば亭主は和服で、夏は浴衣1枚で胡坐をかいて酒を飲んで。ところが奥さんは日本髪を結って帯しめて座って亭主に酒をついで。それが当たり前でそういう時代を子供の頃見聞きしてきましたからね。

神堃: お母様のことをどのように思っていましたか。

笹岡氏: 空気のように、世間では当たり前でした。どの家も外から見通せて、狭い家でしたから蚊帳の中の子供まで見えて。夜はその部屋を箒で掃いて布団を出してね、家族が遅くまで働かないで。夕方帰ってきて丸い食卓で家族そろって食べた。今はひどい世の中ですね。昔はまあ月給は少なかったけれどそれなりに生活していましたね。

照子夫人: 今の人は時間がないです。

笹岡氏: 戦後、PTAの式のときは色無地の着物に黒の羽織でした。金糸銀糸が入ったものでしたね。買えなかったですね。ですから古い着物の色を抜いて作ったわけです。色を抜くと言っても真白とはいかない。

照子夫人: 主人と結婚してから(本格的に)縫うようになりました。学校で襲の着物を縫ったときは難しかったのですよ、いちいち吊して皆の前で下がきちっと合っているか試験でチェックされました。比翼とは違いますから、2枚の着物がきちんと合っていないといけない、まるでスパッと切ったようになっていないと。

笹岡氏: ですから下の着物は小さく作らないとだめなのです。よく、合っていない、出ている、など文句を言ったわけです。

共立女子大の山本らくさんのお弟子の栗原澄子さん、それから河村まち子さん、立派な方々で非常に努力され苦勞された方々で裁縫の実際を研究され、貴重な記録を残されていますが、もう着物は縫うことはなさらないようです。さらに昔は、実物の古い資料を手取ることは出来ず、ガラス越しに見て寸法を取った先生もあったようです。

私は江戸文化をうらやましいと思って、自分もそのようなものを着てみたいと。歌舞伎に行くとそのような人がいっぱいいましたからね、江戸風というものです。永井荷風も江戸風な文化に憧れた人、下町に残っている粋な文化に憧れた人ですが、いつのまにかああいう風に洋服で汚い姿になった。それは、着物の手入れをするのが大変で、洗濯屋に出せばよいものではなくてね。奥さんがいなくなったから、だから着物は辞めた、と彼は日記に書いています。

本当に昔は奥さんが着物の世話を、それが仕事で当たり前。年寄りも協力していました。管理する人がいないと、男の人が着たくてもできないですよ。女性がいる時でないといちちゃんと着物は着られなかった、と言えます。畳んで、しまう、洗う、繕う、季節にも配慮が必要。汚く着ようとしたらそれはそれ。こまめにできなければ垢づいている人も。そういう人をお引きずり、といっただらしなという意味です。着物をだらしなく引きずって着ているたとえです。つい大戦中まで、洒落者は1シーズン着ると洗い張りして、仕立てものに出したと聞きます。だから大きい店の奥さんたちはそういう仕事もしなければならぬし、丁稚の面倒もみてました。江戸時代の本には、京都で主人から使用人に与えるお仕着せ(四季施)を<sup>そぶつ</sup>籠物と言っていました。食べ物、着るものは店で用意しましたからね。昔の奥さんの仕事です。そういう風に昔の女の人にはね、結構仕立物で忙しかったわけです。今のデパートの仕立てのように丁寧に縫ってはいなかったでしょうね。いささか乱暴な縫い方でしょうね。河竹黙阿弥の面倒を見た女性は、一日8枚縫った、というからよっぽど乱暴だったでしょうね。与謝野晶子は羽織は3時間あればできる、と言っています。近藤富枝さんは、芥川龍之介や永井荷風のことなどを採り上げて本に書いてますね。

## 時代衣裳の考証 一 雛形製作

安蔵: 先生は日々蒐集と造形活動をなさっていたのですね。

神埜: 時代背景を合わせても今やこれほどの貴重な存在はありませんよ。

安蔵: 笹岡先生は国語を教えていらしたのですか？

神埜: 雛形を作って教えていらしたのよ。教材を自身で作られたの。その頃の教え子さんたちが今も先生を囲んで勉強会をされているのですよね。文学を見ると同時に風俗習慣も学ばれている。先生とお年もあまり変わらないですよ。

照子夫人: 毎月いらして何かやっていました？ 私は下働きで。

笹岡氏: その生徒さんたちは77か78歳くらいでしょう。

神埜: 先生、雛形(図7)ってすぐに出ますか? 十二単など装束の。

安蔵: 生徒さんたちにどのように教えていらしたのか、拝見したいです。

(すぐに箆笥の引き出しを運んでくださった。)

笹岡氏: あまり上手でないです。これは撫子襲ねだね。「満左須計装束抄」にある。これは紫の薄様ね。

神埜: 風俗史学会服飾部会で披露されたことがあります。

笹岡氏: これは鎌倉の鶴岡八幡宮の国宝を真似ました。これは装束抄にある綿入れの、移ろい菊です。各部の縮尺は合わせてあります。

安蔵: これは葵紋で彩がきれいですね。

笹岡氏: 小さい文様の絹織物を探してね…これも話せば涙、涙の……ね。当時は巢鴨のお地藏様辺りで下着の白いのを探して、なるべく模様の小さい、きれいなものを求め、色を染めて作ったわけです。文様の一つ一つは色を変えて多色染めにしたものもあります。それから、これが襲ね色目の二つ色で。これが汗衫の姿。こういう模様はね明治以降ですね。これは木目込み人形の裂。「満左須計装束抄」の寸法と合わせてね、4分の1で作ってありますね。暇人でしたね。

安蔵: 装束書を使って実際に作られたんですね。

笹岡氏: これなんか涙の作品。これは高校生のときに文様を皆刺繍したんですよ。昭和13、14年の頃です。十二単のこれは上着でね。この縫い目は母親が縫ってくれた。後のはね、夏休みに作って。破けています、50年前ですからね。これは江戸初期の男の着物ですね。絵巻の中の千姫の相手ですね。この生地は戦時中の技術保存のためにあったもの。鎌倉時代以降の装束抄には寸法が書かれています。人形も作りました。これはさっき雛人形にあった捻襦の袴ですよ。こういうふうには特殊でしょ。奈良時代の中国から教わったのでしょうか。

照子夫人: 話だけでは解らないところを、見ると分かりますね。

笹岡氏: これは指貫ね。女官の捻襦はこれで。こちらは四角の襦で男性用です。

照子夫人: ほんとに暇人でしたね。家の事は何にもしないで。

笹岡氏: 庭の植木やいろいろ、屋根に上ったり、やりました。だから寝る時間がなくてね。こういう裂を探すのにあちこちを本当に歩きましたね。

神埜: 十二単の原寸大の袖だけのものもあります。

笹岡氏: 綿を入れたものと入れないものの区別は明治まで、更衣(衣がえ)は厳しく行われていました。袷と綿入れ、このほかに口綿といって、袷だが袖口と裾だけに綿を入れたものが明治・大正にはできました。今はそんなことは気にしません。綿入れの季節に袷を着ていると恥ずかしかったものでした。

安蔵: 小さなかわいい裳にちゃんと摺りを施してありますね。刺繍もすごい。

笹岡氏: ひとつ置きに表裏となって、上刺しの糸が蝶の模様になっています。摺りは型の様に手で描いたんですよ。



図7 引き出しに収められた装束などの雛形

安蔵: 本当に型のようなのですが。

笹岡氏: 「源氏物語絵巻」にも出てくる二つ色や、単襲ねとか。風俗史学会の会でお見せするのに、例えば10枚重ねたものを作ってみましたけれど、実物の4分の1になったときには、布の厚さは薄くはないわけで、実際のものとは異なります。やはり雛形は雛形です。

神埜: だいたいはいつごろの作ですか？

笹岡氏: 50年くらい前です。教師の頃の。

照子夫人: 生徒が皆で作った人形が偶然手元に戻ってきたお話をお聞かせしては？

笹岡氏: 務めていた学校でね、十二単など装束を着せた人形を5体くらい作って飾っておいたのですが、ずっと飾って置いて色が変わり、学校を転任した後、女の先生が処分しますが良いですか、ということがありまして。そのとき、学校の費用で作った物だから、どうぞと言ってお任せしたんです。その人形の顔は伝統工芸の生徒に作らせたものです。関心がないんですね。それを幾年か後に東郷神社の露天市で見かけたんです。3000円で売ってまして、私が作ったんだからと言って2000円で売ってもらいました。顔は傷んでいたので作り直した。他の男性や童、束帯などのものは出てきません。ちょっと惜しいと思ったけれど、材料費をもらっていたから仕方ありません。50年くらい前のことです。

この間は、吉徳の小林君が私の持っている後家雛（男雛のない半端の雛）で、これは旧三井家蔵という立派なものですが、男雛には頭（かしら）がなかった。その頭を、林君が、なんと京都で探し求めて来ました。不思議な出会いです。

安蔵: 関心のない人には必要のないもので、捨てることに躊躇はないのですね。でも巡りめぐって出会うってことがあるんですね。骨董市をよく歩かれているからですね。

笹岡氏: 埼玉大学の先輩がね、好きだろうと言って廃棄された雛形を持ってきたことがあって。とても丁寧に作られているものです。特別な生地がないからちゃんとした文様を描いてあって。私のところに来なければ、襦袢だから捨てられてしまうんですね。それから学校で生徒に雛形を作らせても、仕立ては良いが木綿のつまらない材料で作ってあるのは残念ですね。高田装束店では雛形の人形を作っていましたが、やはり特別で京都に織物を高級なものを発注して用いています。その織文様などは皇后様が御召しになるような物で、非常に良い。しかし雛形にするときは縫い代が何分の1の関係で1ミリ2ミリになり苦労するそうです。

神埜: どこの学校でも雛形教育があったはずですが。でもほとんど残っていないでしょう。

安蔵: この先生の雛形を見て育った方々がいるのですよね。感動です。

笹岡氏: この人形はふるさと館の展示用に、十二単の包みを頭に担ぐ姿を見本のために作った人形。当時の下駄も作って。

神埜: 「扇面古写経」の場面からでしょう。

安蔵: 垂櫻の冠もありますね。生地は紗のようなものを何かで固めたのですね。小さい文様がよくありましたね。

笹岡氏: 話せば涙、涙の物語ですね。模型ですから、大変。

安蔵: 建物の模型は高価ですよ。衣類の模型は需要が少ないし、史実に則って作るというのは、本当に限られた個人か、装束の専門店で作る、ということでしょうか。

神埜: 昔の家を残すのは商売になっていますけれど。基本的に染織は残せませんから。

安蔵: これは先ほどの屏風のへりの生地ですよ。亀甲の文様の。

笹岡氏: そうね。なんでも取ってあります。実物大の袖も作りましたよ。府中で生涯学習の講義のためね。

神埜: 2年前ですね。

(2階のお座敷に移り、裂が収められた重厚な作りの折本裂帖を開いて数々の史料を拝見した。折本の小口は、紫の薄様の襲ね色目をイメージした表装で、渋い紫から淡くグラデーションが表現されている。今回は、昭和の初めに古道具屋で見つけられた付紐・背守りの見本、公家装束の裂、袋の内側に使われた東海道五十三次や桜の名所の織文様、江戸初期に渡来した縦縞の好み、高度な技法の鹿の子絞り、明治時代の矢絰など、順繰りに解説してくださった。)

安蔵: 美しい裂帖ですね。本(裂帖)そのものが作品ですね。この緒の量し染めも、コーディネートされていますね。どのようにして量すのですか?

笹岡氏: 紫は難しいです。帯締めを板締めみたいに白いところはくるんでおいて染めます。たくさん昔からやっていますから。他に能がないからですが。

神埜: 史料の一つひとつの来歴を伺って、記録しておきたいですね。

笹岡氏: 変わり者が、どこかに何か落ちていないかな、って歩いているんです。京都ではいろんな裂があったんです。昭和20年頃はありましたね。もう少し前に生まれていたらね…。

### 屏風に生かされた古裂の鑑賞

安蔵: 伺おうと思っていたものがあります。小忌衣おみごもの貼ってある屏風(図8-1)のことです。

笹岡氏: 采女の? ちょうどここにありますよ。采女の波衣なみぎぬ、絵衣えぎぬ、小忌衣です。これは昭和のご大札の頃のものですが。室町時代あたりからの様式です。小忌衣の文様でこの蝶(図8-2)は緑色ですね。少し緑が濃いです。

昔は本当は山藍の摺り染めでしたから、その場合は茶色っぽくなっているはずですが。ですから、これは化学染料で摺ったかと思います。

安蔵: 本学に、公卿が着た袖のある小忌衣があります。いずれも文様は彫った型を使ったものだと思います。文様にある繋ぎが特徴でわかりますが、文様の色は緑というより、淡く茶味がかかった色です。このようにくっきりはしてはいません。

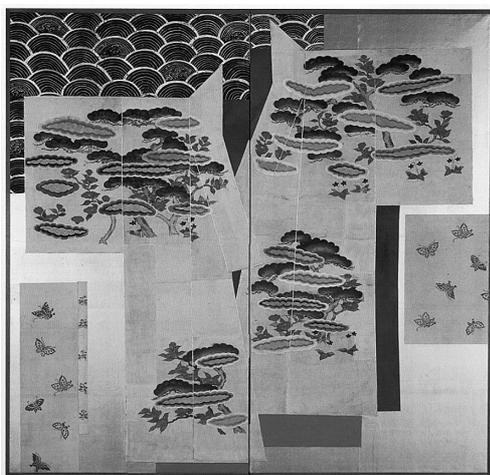


図8-1 采女装束絵衣波衣小忌貼付屏風



図8-2 小忌衣の文様(部分)

笹岡氏: それは山藍でしょうね。

安蔵: この采女の衣はどのようにして入手されたのですか？

笹岡氏: こういうものは一回使用した後は廃棄してしまうものですね。これらは古物商の北村（勝史）さんに譲ってもらいました。この屏風に仕立てたのは幾種類かあるうちのひとつを使っています。絵衣は雨漏りのために半分くらい駄目になっていました。膠が使ってあるのでこわばって、長年経つと劣化してしまいます。絵の具は残りますね。この小忌衣は絹です。一番簡単な形で袖のないものですね。絵衣の雲は縹緗です。こういう描いたものは、織物より格が下がるようですけど、金銀の絵の具を使っています。椿は江戸時代では花が落ちてあんまり良くないといいますが、公家社会では、中国の「莊子」という本にあって八千歳を春と秋にするめでたい木なので文様にしたのです。中国の椿は日本のものと違いがあるようです。花が落ちるのを武家は首が打たれるとって嫌いましたが、江戸時代のものでもモチーフにしているデザインは多いですね。

絵衣というのは采女が式のときに単の赤いのを着て、緋の袴を穿いて、これ（絵衣）を着て、裏は緑色を使っています。その上に波衣を着ました。平安時代の十二単の唐衣の代わりにします。波衣の青海波の模様は胡粉で描いてあります。私の持っているものは汚れや傷がなくきれいですから、切ることはもったいなくて模造して貼りました。

采女の装束は、室町時代からこれらがセットになっています。その上に大嘗祭の場合小忌衣を着るのです。采女というのはご大礼の時は8人が指定されるようですけど。あれは古代地方官から天皇に従順の印として宮廷に差し上げたわけですね。お膳の扱いなどの仕事をする人です。

安蔵: 歌舞伎で殿様が着る小忌衣というのがあります。南蛮のような襟のですね。江戸初期の外国の影響でしょうか？

笹岡氏: 間違いが平気で定着するんですね。お雛様で享保雛と呼ぶのも…ね。

神埜: 小忌には神聖な飾りという意味があるのでしょうか

笹岡氏: 袖の下を縫わないのも神聖なものの象徴でしょうか。

安蔵: 本学のもは、袖下の中央1点をこよりで括っています。それで、先生が一番初めに手掛けたもの、製作なされたもの、というところのようなものでしょうか？

笹岡氏: 昭和15年頃に露月町で買った襦袢を屏風に仕立てたのがあります。染みをとったり繕って切り張りみたいにして、似たような裂を嵌めて、そうやって屏風に再生してあります。こうして楽しんだその屏風を、もう一度今繕って作りかけています。2、3日前から。この屏風です。

これはお寺の打敷といまして、仏殿の前のお線香の下に置くものです。古着屋で一番安いから買って、屏風にしたのです。あんまりひどいから、接いだのが分かるのですが、元は江戸中期の庶民たちが着た麻の着物なのです。こういう金糸などは刺繍が細かいやり方です。わりあいとていねいな糸目糊の染めです。麻で、夏のものなのですが、桜、千鳥の模様です。季節では冬と春です。杉の木は小さくてバランスを欠いています。しかし刺繍は非常に丁寧にしてあります。昭和15年頃に作ったものをもう一度貼り直します。へりは銀箔を使ってそれを硫黄でいぶして作りました。細かい亀甲文様が見えるところは、平安朝的な裂を四方のへりに回しているからで、銀が透けているのです。そして銀が重なって厚い箇所には輝きがあります。

安蔵: へりの造作にまでこだわってこそトータルな作品に。そして屏風の蝶つがいのところは？

笹岡氏: 両面できるようにしてあって、こういうのは朝鮮辺りから教わったらしいと思います。ヒモ

でつなげる銭型屏風というのは正倉院にあります。この屏風は以前、高校の教師の頃に、生徒の催しでね、「源氏物語」の末摘花の部屋に使ったんです。

### 家族を繋ぐ思い出の晴れ着 ー婚礼, お宮参り, 七五三

神堊: 奥様の着物姿の写真はないですか? 着物の作品とちょうど合わせて一緒に見てみたいですね。着た時の感じがありますから。

安蔵: 展示のとき、洋服はボディに着せますが、着物は平らに見るのをよしとするので、着装するとどうなるのか、大事です。これはお嫁さんの写真ですね。

笹岡氏: そうです。これは長男のお嫁さん(図9-1, 2)。この着物です。「よみがえる裂」展にはお嫁さんのこの着物は出ましたが、今度の展示には出ませんから。

これは家内の単襲の。作った私は覚えているのに、着た本人は覚えていないんですね。

照子夫人: 写真を見る暇もないくらい。馬鹿みたいに忙しいんですよ。着物地でコートはいくつも作りました。洋裁も少し習いましたけれど、着物の生地で洋服を縫うときは手縫いです。もったいないから。

安蔵: たしかに絹ものにはミシンは合いませんね。またアルバムそのものが裂の造形ですね。

照子夫人: アルバムも着物もみな主人が作りました。これは夏の襲で、皆さんいいって言うんですよ。これは誰かの結婚式のときです。

安蔵: この写真は奥様とお嫁さん。両方のお着物が「よみがえる裂」展に出ていましたね。

笹岡氏: それはね次男の嫁さんですから。うちの嫁さんたちはかわいそうですよ。着たい物を着られないで。本当は洋服なんか着たかったでしょうね。

照子夫人: これは主人が退職するときにパーティーで撮っていただいた写真です。

笹岡氏: 30年前です。若かったですね。

神堊: それ、帯がすばらしい、きれいですね。そういう風に利用するのですね。

笹岡氏: けちんぼはね。こういうのもね、高い値段でなくてできます。

次男の結婚のとき、長男の子のために古着を染め直して一面に文様を摺り箔で表しまして作ったもの(図10-1, 2)ですね。その家内の着物(図10-3)は家内に刺繍させたもの。黒地にね。普通と違って袖にも刺繍しているんです。

神堊: これがピンクのお色直しですよ。お孫さんのも全部縫われたのですか?

照子夫人: そうです。

神堊: この、赤ちゃんの着物(図11)は?

笹岡氏: 産着などは家内の使用したものを着せました。

照子夫人: そんな話は忘れていました。うふふ。

神堊: 奥様のお宮参りの産着も取っていらして?

笹岡氏: 女の子には、家内の宮参りの時の着物、そして孫たちの七五三には私が創って(図12-1, 2・図13-1, 2)着せたわけです。

神堊: 蔵出し話です。めったにないですよ。これだけ着物と深く関わっていらしたご家族の姿は。

安蔵: では、ご夫妻の婚礼のお写真を拝見したかったのですが、見つからない、ということで、残念ですが、お孫さんと先生方、お嫁さんの着物姿のお写真を、資料とさせていただきたいと思います。



図9-1 ご長男のお嫁さん  
昭和47年新婚当初 (図9-2を着装)



図9-2 黄茶地色紋縮緬御所解文様中振袖と帯



図10-1 ご長男のお子さん  
昭和49年ご次男の結婚式にて  
(図10-2を着装)

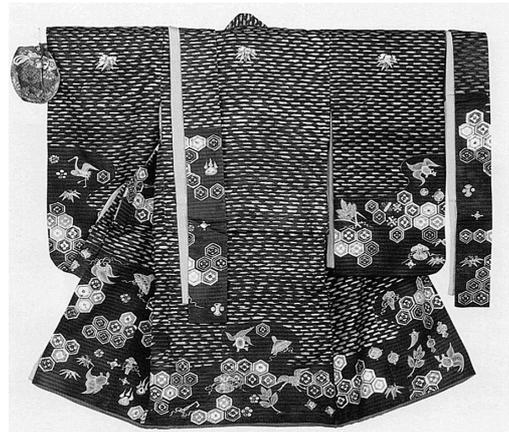


図10-2 鉄納戸色縮緬宝尽文様一身上着物



図10-3 照子夫人とお孫さん  
昭和49年



図11 笹岡先生とお孫さん  
(昭和57年 照子夫人の産着を着装)



図 12-1 笹岡先生とお孫さん  
昭和 61 年 3 歳のお祝い  
(図 12-2 を着装)



図 12-2 縹色縮緬松竹梅菊文様祝着と帯

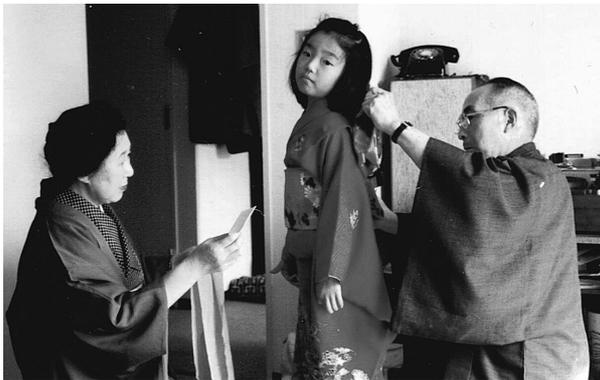


図 13-1 昭和 57 年 お孫さんの 7 歳のお祝い着  
(図 13-2) を着付ける笹岡先生ご夫妻



図 13-2 蘇芳色紋縮緬花熨斗文様祝着

(着装資料として、お写真をデータ化するため拝借し、今回のインタビューを終了した。ご夫妻は門の外までお出になって、我々が多摩川沿いの道の角を曲がるまで見送って下さった。)

後記: ご夫妻が語られた一言一言からは、有形・無形の文化的諸相の発見が多々ある。一例を挙げるとすれば、儉約生活の一面を象徴する、繕う・継ぐ・接ぐ・繰り回すなどの衣をとりまく日常の仕事が、一方で裂や着物の製作当初の用途や格を変容させ、新たな息吹を与えるほどの楽しみや喜びに繋がること、言い換えれば、造形意思に支えられた営みであることを改めて知るのである。

この度は、ご夫妻をお煩わせしたうえ、聞き書き原稿のご校閲まで賜った。ここに伏して御礼申し上げます。また、笹岡夫妻の生活史を服飾の視点から捉える意義、染織蒐集史料の記録作成の重要性を説き、その基本的手順として本対談をご提案下さった神埜正子氏に感謝申し上げます。

(本稿は平成 21 年度科学研究費補助金〈基盤研究 (B) 課題番号: 18300243〉による調査研究の一部である)

(あんぞう ゆうこ 歴史文化学科教授・近代文化研究所所員教授)